

日本の英語教育が今直面している一番大きな問題は、幼小中高大を通しての一貫した英語教育に対する考え方とその具体的なカリキュラムの策定である。英語教員研修で全国を回ることがよくあるが、その際に感じるのは、いかに、中高の教師でさえお互いのことが良く分かっていないか、ということ。高校の教師に中学の教科書をみたことがあるか、と聞くと、殆どの教師が「ない」と答える。にも関わらず、高校に入学してきた生徒に、「こんな簡単なことも知らないのか」と呆れる。中学の教師に言わせれば、「折角音声、会話中心のコミュニケーションを重視して中学で教えてきたのに、高校ではそれをまったく活かそうとしていない」。大学の教員は「最近の学生のレベルは下がった」と、一見達観したようないやみを言う。

そこに、小学校に英語が入ったらどうなるのだろうか。小学校では、英語を知識として教えることが目的ではない。英語に「慣れ親しみ」、英語でコミュニケーションを「体験する」ことが目的になっている。しかし、それがわかっていなければ、今後、中学の教師から、「ABCも書けなくて一体小学校で何をやっていたんだ」と叱責される生徒が出てくるだろう。

ここで一番考えなければならないのは、上記のどの状況においても、結局叱られ、バカにされ、呆れられるのが「生徒」だということである。子どもたちは、教師にバカにされる度に英語に対する興味関心が下がり、出来ない、という気持ちが強くなる。事実、国立教育政策研究所の調べによると、中学3年生が最も「分からない」と答えている科目は、「英語」(約30%)である。出来ないし嫌いだ、が、不思議なことに、同じ生徒の約80%が英語が必要だ、将来役に立つ、と答えているのである。

子どもたちに本当に責任があるのだろうか。必要だ、将来役に立つ、と思いながら、嫌い、出来ない、と感じるということは、折角具体的なモチベーションとして育つ可能性がある芽を誰かがどこかで摘んでしまっていることを意味するのである。では、教師に責任があるのだろうか。自分が教えているレベル以外について研究することをしない、という点では、責任の一端はあるといえるだろう。しかし、彼らだって、何をどう教えるかについては、全く自由というわけではない。決められた「学習指導要領」に基づいて書かれた検定教科書を使って、決められた時間の中で終えなければならないのである。

そこで、本紀要では、ARCLEが日本の英語教育に一貫したカリキュラムを提案するECFと、生徒が到達すべき目標を明確化するためのCAN-DO研究に基づいた成果を中心に、今後の日本の英語教育を考えるための具体的な提案をしていく。子どもたちに本当に必要な英語力とは何か。それをどう教育すれば良いのか。その答えを本紀要は追い求めていく。

上智大学外国語学部長・教授 / ARCLE代表

吉田研作